東郷町のまちづくりビジョンと有機農業

―井俣憲治東郷町長に聞く―

東海自治体問題研究所では、2019年の総会記念講演で関根佳恵先生(愛知学院大学)に「国連家族農林漁業の10年の取り組み」について講演いただいて以降、三重県伊賀市の愛農会の取り組み、名古屋市中区の「オアシス21オーガニックファーマーズ朝市村」の取り組み、岐阜県白川町の「ゆうきはーとねっと」の取り組みを取材し、所報で紹介してきました。

今回は愛知県東郷町の有機農業の取り組みについてお話を伺おうと、8月9日(火)に事務局メンバー3人（原、長谷川、羽間）で東郷町長をお訪ねし、取り組みへの思いを伺いました。東郷町は、2019年度に学校給食に有機食材を導入して以降、有機農業を推進するまちとして全国的にも注目を集めています。しかし井俣憲治東郷町長は、「有機農業ばかりが突出して注目されているが、有機農業推進は欠かせないパーツではあるものの、まちづくりビジョンの一つに過ぎず、東郷町をどのように魅力あるまちにしたいのかというビジョン全体に着目してほしい」と強調され、当初１時間の予定を大幅に超過し、２時間近く、町長の熱い思いをお聞きすることができました。次に、町長のお話と頂いた資料を基に、インタビューの内容を報告します。

東郷町のまちづくりのビジョン

東郷町は、名古屋市と豊田市の間に挟まれた典型的なベッドタウンで、人口増が続いています。近郊都市としての地理的条件の上に、比較的地価が安価という好条件を、成長のエンジンとして発展してきました。

しかし、全国的に人口減少局面に入った今、地理的に有利な条件というだけでは、衰退していってしまいます。全国的に人口が半分に減っていっても、東郷町の人口を維持し、子どもたちが生き生きと過ごせ、高齢者や障がい者を支えていけるまちをどうつくっていくのか、そのことが問われています。

そのためには、地理的有利さだけではなく、住民に選んでもらえる魅力あるまちをつくっていく必要があります。

子ども、子育て世代に喜ばれるビジョン

東郷町を住み続けたいまちとして「選んでもらえるまち」とするために、どのようなビジョンを描くのか。

例えば、子どもたちが生き生きと過ごせる

お話しいただいた井俣憲治東郷町長（左側）

まち、子育て世代に喜ばれるまちにしたい。

≪少人数学校≫

そのために、来年度から全学年35人学級にします。さらに再来年からは小学校全学年30人学級をスタートできるよう議論を進めています。人の手当のめどはおおよそついてきました。

≪医療費助成を大学生にまで≫

また、医療費に関しても現在18歳まで入院・通院無料にしていますが、18歳から20歳までは入院無料にし、学生については18歳から24歳まで入院無料、さらに東郷町に親がいて、町外の大学にいる扶養している子どもたちの入院費用も、所得制限なしで無料にしたいと考えています。

親元を離れた学生たちも在学中に入院となれば、下宿代と学費の上に入院費を払わなければならなくなる。当然入院中はバイトもできない。この子たちが、卒業後、東郷町にもどってきてくれればもちろんうれしいが、大学で得た知識をもとに日本や世界のどこかで貢献してくれれば、それでよい。償還払い（窓口でいったん支払ってもらい、申請により払い戻す仕組み）で、学籍証明書を添付してもらう予定です。子どもたちをここで育ててよかったと思っていただけるように、子どもたちもそれが理解できるように。

また、農家さんが相続税対策で建てたアパートが、経年劣化してきており、だんだん家賃を下げざるを得なくなってきている。そういう所に大学生を入れようという狙いもある。東郷町に住めば大学生は入院費が無料になり、アパートを提供できる。こうしたことが東郷町選択の理由の一つになるのではないか、と考えています。

さらに、夏休みには、大学生に小中学生の勉強も見てもらっています。学校や図書館、児童館を使って無料で。学生が住み、行政とつながって連携できるようになれば、空き家対策にもなるし、子どもたちとの関わり、子育て、学力支援での連携も前進が可能となり得、将来の役場の人材になど、いろんなことも含めて、選んでもらいたいと思います。

≪全食物アレルギー除去給食≫

全食物アレルギー除去給食（にこにこ給食）もその一つです。

保育園児と小中学校の児童・生徒5,500人のうち給食が食べられない子が130人もいました。中には牛乳がかかるだけで危険ということで、一緒に食事するのもダメという子もいました。ご家庭で日々の給食の献立に似せて弁当を持参していただいていましたが、平日お母さんの休みを作ろうということで、子どもたちが持っているすべての食物アレルギーを排除した給食作りに取り組みました。

130人の食物アレルギーをリストにして、使える食材を洗いだしました。給食センターの人は「これだけしかないのですか」と言われたが、これだけあれば作れるので大丈夫ということでお願いしたら、非難ごうごうでした。しかし、いざ実施すると、子どもたちや保護者の皆さんからものすごい感謝の声が寄せられました。

びっくりしたのが、「うちの子どもが初めて給食当番ができた」という感謝の言葉だった。給食をみんなで美味しく食べられたということも大事だが、給食という場で誰かのために仕事することが出来た、それがすごくうれしかったと言われた。手紙で感謝の言葉をつづってくる家庭もあった。こうした反響がある中で、給食センターの職員も取り組みに前向きになりました。今、月２回実施しようとしています。

≪国際化時代の教育の工夫≫

国際化する時代の中で、多様性を尊重するということも教えたい。現在、町立保育園には、ネイティブの先生が週２回終日一緒にいて、園児たちと給食も一緒に食べて、会話のやり取りを行う英語活動も行っている。年少で入って年長で出ていく頃にはほぼほぼ会話

ができている。しかし小学校に入ると機会がなくなるので、オーストラリアのポイントクック校と、Skypeで交流授業を行っています。夏にオーストラリアの先生が、直接会いたいとこちらに来ていただいて、実交流もしました。こういう形で、英語を話す機会を作り、英語に対する抵抗感をなくすようにしている。点数よりも、会話できることを重視している。これも、親御さんに喜んでもらえています。これもまた東郷町選択を目指すまちづくりの一つだと考えています。

働く世代が、「ここで子どもを育てたい」自分の子どもを幸せにしてくれると思う所には、多少の困難があっても来てくれると思います。

≪高齢者・障がい者福祉≫

その他、先日新聞にも載ったデマンドタクシーの取り組みや、来年の1月から実験的にスタートさせる高齢者の皆さん向けの学校の取り組みもあります。1時間目は算数、2時間目は歴史をやり、昼には子どもたちと同じ給食を食べて、掃除していただいた後に、健康診断を行う（ここは健康部局が入って実施する）。

今、老人クラブの組織率はどんどん落ちています。関心がある方に来ていただいて、そういう授業が受けられる。今高齢者の中で「数独」がはやっていますが、一人でやるのではなく、みんなでワイワイやりながら実施する。こうして、新しい絆づくりができるといいなあと思っています。

≪そして環境・有機農業≫

こうした東郷町を選んでいただくキーワードの一つとして、「環境」を掲げました。

環境・食・教育・子育て、すべての所で、町民の皆さんが望んでいること、そして、将来の東郷町の経営ということを考え、どうしたら福祉がまわしていけるかという観点で、将来への投資も含め、やっているものです。有機農業は、そうしたいくつものイメージに対するバックキャストの一つとして、考えています。

有機農業推進で広がるビジョン

東郷町は都市近郊でありながら緑を多く残しているという特色があります。農地を保全することでただ荒れている緑ではなく、手入れされた緑を残したい。そのことが、景観向上、魅力向上につながると思います。さらには、保水機能などの防災機能の維持などにも繋がります。

≪有機農業で高付加価値を生む≫

しかし、都市近郊農地には不動産価値があります。資材置き場にしても駐車場にしても、結構価値がある。このあたりだと駐車場1台につき5千円ほどなので、20台の駐車場にすれば月10万円は入ってくる。一方、今米は一反（約300坪）で8俵（1俵60kg）ぐらいの収量。そして1俵の買取価格は1万円。つまり、1年間田んぼやって8万円。ここから苗代・肥料代・農薬代など、さらに農機具の償却分を引くと、いくらも残らない。一方トラクターの買い替えはちょっといい機種だと1千万円かかる。トラクターを買い換えたある農家では、1千万円あれば死ぬまで（次の代も）コシヒカリが食べられる、何でこんなものを買うのだという話も出た。これが多くの都市近郊農業の現実だ。北海道や新潟の方の広い田んぼのエリアはまた違うのかもしれないが、買取価格はそう違わないので、子どもに農業という事業を継承できるのかという問題は同じではないか。子どもを高校や大学に行かせるには年間4～5百万の現金は必要になる。しかし、10反でも80万円、どれだけやらないといけないか、という問題が生じます。

そうした状況の中で、この農地をどうやって維持していこうかと考えた場合に、より付加価値を上げるか、1反当たりの収量を上げるしかない。収量の大幅なアップは難しく（企業と研究はしているが）、付加価値を上げ

ることを考えた場合に、オーガニック、なるべく農薬を使わない、あるいは無農薬の農業を推進していこう、ということで、始めました。

≪スタートアップとしての学校給食≫

その際、作ったはいいが、買い手(販売先)を探すことが農家の方は難しい。ならば、スタートアップではないが、東郷町の学校給食を購入先として提供し、皆さんの収益を支えます、給食センターで一括購入しますよということを、農家の方と約束しました。それが、１期目町長に就任して３日目とか４日目の話です。

農家の方にとって、有機農業にチャレンジすることは試行錯誤を要することで、買い取り先の心配をしないで生産に集中できるということは、重要なことです。そういう形で、農地を保全していこうと考えました。

≪有機農業で発揮される多面的機能≫

農地にはもう一つ、ゲリラ豪雨・水害対策という機能もあります。災害対策については安全安心課という部署が別にありますが、連携してもらわないとだめだよ、と言っています。特に、低地における農地はどうしても維持していきたい。

都市化するには調整池を作らないといけないことになっているが、一個作ると億単位の予算が必要となります。調整池に億のお金を使うのと、農業に億のお金を使うのとどっちがいいですか、ということです。その選択の時に、私はいくつかの効果が発生する有機農業を選びます。調整池を作るのは安全を維持するための手段に過ぎません。しかし、有機農業は、安全を維持しつつ、環境を維持し、食も守りつつ、生物の多様性も維持して、子どもたちも喜ぶ。多くのことを達成できる方がよいに決まっています。

実際、オーガニック給食をはじめた時、保護者の皆さんはすごく喜んでくれました。評価を受けるほどやっているわけではないので、こちらが恥ずかしいぐらいでした。こうした評価の声を受け、もっと進めていかなければいけないと思っています。

もちろん、慣行農業（農薬や化学肥料を使って慣行的に行われている一般的な農業）が悪いわけではない、慣行農業は一つの選択肢です。慣行農業を排除しようとは思っていません。しかし、慣行農業では生物の多様性の維持が難しいですし、付加価値をつけようにも、難しい。付加価値の高いものを作って私たちが値付けをして、それを買ってもらえるようにしたい。実際、東郷町でそういうことをやるんだったら購入したいという業者さんは出てきています。

環境という中には、災害も含めた水害対策、緑地、温暖化の抑制、CO_2の排出抑制、生物の多様性の保持なども含まれているのです。

≪子どもたちの遊び場としての有機農業≫

農作物は、微生物はじめ多様な生物が作ってくれた土からできている。人間の手も加わってはいるが、生物多様性の中で作られた土壌によって生かされている。いろんな生物がいるから生きていける、ということを学ぶ機会にもなる。改めて学ばなくても、感じてもらえるような環境が普通にある、そういうまちは、選ぶに値するまちとなるのではないでしょうか。

田の畔を子どもたちが走り回り、畔の周りの水が流れるところでオタマジャクシやヤゴを見つけられる、そんな環境を残したいと思っています。

≪有機農業で培われる食育≫

東郷町では、有機農家の方の学校訪問、保育園での有機農業者との交流・自然栽培での野菜作り、親子有機野菜作り体験などに取り組んでいます。幼少期の体験は一生の宝物になると思います。小さいころから食と農に触れてもらうことで、食物の大切さや野菜本来の味を知り、生産者に感謝できる大人になってもらいたいと思って進めています。保育園

児に収穫体験をしてもらい、その農家さんの人参が出たときは、完食していました。

また、農家の方も学校で一緒に給食を食べていますから、子どもたちを見かけると農家さんがオーイと声をかけてくれる。子どもたちの行き帰りを見守ってくれる。最近スクールガードマンをつけている学校も多いそうですが、まち全体で子どもたちの見守りが可能になることでしょう。

≪給食センターの努力と協力があってこそ≫

給食の食材については、決められた納入業者でしか納入できないということがあったため、納入業者であったＪＡあいち尾東さんを通じて納入してもらうことで解決しました。また、供給量について生産者とすり合わせる必要があり、毎月生産予定や供給可能量の確認を行っています。

農家から給食センターには泥付きで持ってきてもらっています。規格についても問題にしていません。曲がっていても大きすぎても調理してしまえば問題がありませんから。昔から、四里四方の物を食べていれば病気にならないと言われていました。そういう事もあり、東郷町では規格は考えていません。

なお、給食センターでは、オーガニックの給食をとり入れる前に、砂糖もなるべく使わない、甜菜糖や煮切りみりんなどを使用し、ゼロを目指すように求めました。子どもたちが健康であれば保護者さんは喜ぶ。そういう環境も作っていきたいと思っています。

≪有機無農薬米の導入も視野に≫

そして今、来年もしくは再来年には２町歩ぐらいから有機無農薬米をスタートさせたいと相談しています。２町歩というと20反ですから、７俵とれたとして７俵×20反で140俵分を学校給食に入れていきたいと考えています。政府の買取価格の2～3倍くらいの値段で買い取って、農家さんの所得をあげたいと思っています。私たちからすると、調整池作るより、そちらの方が価値が高いと考えています。農地を維持しつつ、環境を守り、子どものいい遊び場を作っていただくようなことができるように考えています。

≪有機農業推進からまちづくりへ≫

他の自治体において学校給食に有機農産物を導入されましたが、外国産有機バナナを購入したとのこと。私たちとは考え方が違うと思いました。私たちは、単に学校給食に有機農産物を入れることだけを施策目的にしている訳ではありません。

繰り返しになりますが、地産地消による農業支援、防災、環境、生物多様性、全てをひっくるめて考えて、施策を組み立てています。

昔は、農家の皆さんが協力して農作業をやらないと維持できないので、皆で助け合っていました。その延長線が自治会だったような気がします。そうしたつながりを大事にしていきたいということを、役場から発信していきたい。防災・防犯でも、昔はみんなが誕生日になるとその家に上り込んで食事して遊んでいた。親同士も酒盛りをしていた。親が体調壊したら隣の家が子どもを呼んで食事させたりが普通にあった。

普通でなくなったのであれば、意識的につながりを作っていかないと、防災・減災のハードルはあがると思う。私たちの子どものころは、近所の家の爺ちゃん婆ちゃんがどの部屋で寝ているかも知っていた。上がり込んで食べさせてもらったりしていたので…。今は、災害が起きても、あのうちに爺さん婆さんがいるかすら知らない。どこに寝ているのかもわからない。そんな状態でどうやって助けるんだということになる。

少しおせっかいで、少しクールで、という距離感。こうしたことは、名古屋市や東京のような大都市では難しい。18㎢、4万5千人程の都市だからできるまちづくり、それをいろんなコンテンツ含めて評価していただき、選ばれるまち、災害の少ない、本当の意味で緑あふれる、子どもたちの将来を見据えた施策展開を図っていきたい。

行政が有機農業を推進するとは

≪農家や事業者との信頼関係を築く≫

有機農業を進めるためには、誰がやるのか、どこから担い手を連れてくるのか、どう定着させるのか、誰が管理するのか、誰が買い取るのか、給食を超えた分どうするか、全部これ役場の仕事になります。この覚悟がないと、有機農業を進めることは困難だと思います。

農業を営むには、一定程度の面積を集約化してあげることが必要。兼業ならいけるかもしれないが、有機農業は片手間では難しい。水の管理も必要。ICTを使って支援することも検討しているが、土日だけの農業では難しい。農家でも子育てができて、家族を幸せにできて、と考えると、いくらぐらいの所得が必要なのか、そのためにはどのぐらいの面積が必要なのか、ということを考える必要がある。じゃあ面積確保をどうするか、それらをどう役場が支援できるかを考えています。

例えば有機農業をやりたいと言ってきた人に対しどうするか、農地を借りるとしても簡単ではない。先祖代々守ってきたものを誰かに貸すというのはそう簡単にできるものではない。結局はその人に対する信頼が大事になる。じゃあ役場がどう関与するかを検討させている。また、東郷町にも農業法人があるが、担い手の高齢化が進んでおり、問題解決には至っていない。私たちの有機農業の戦略では、法人の皆さんにも入っていただき、何せ古い方の方が無農薬のコメの作り方を知っているので、そういう方々も混ぜながら、野菜については、いろんな民間スーパーの皆さんとも連携しながら、やっていきたいと考えています。

そして、産業部署の職員に言っているのは、有機農業で作った食材は、給食だけでなく、いろんなお店においてもらう必要がある。高級なスーパーに営業に行ってこいと言っています。農家さんは営業に行っている暇はないので、職員に営業活動をお願いしている。農家の皆さんと信頼関係を築いた次は、事業者さんと信頼関係を築く必要がある。デジタルの時代に、あえて人と人とのつながりに価値を置く取り組みを重視している。事件は現場で起きているので、現場に行こうと言っています。

米で言うと、先日有機農業の先進地である千葉県いすみ市へ行ってきました。話を聞いたら、JALのファーストクラスのコメはいすみ市の米だというのです。しかも、足りないからもっと作ってほしいと言われているそうです。しかし、子どもたちの給食用のコメを回すわけにはいかないので、断っている状況とのこと。いすみ市さんに数年後れをとってしまっていますが、有機農業を推進する他自治体とも情報交換しながら進めていきたい。

≪有機農業の科学に学ぶ≫

このように、私たちも有機農業を進める上での課題を知っていないといけない。農家さんが困ったときに農家の方と一緒に涙流せるぐらいにならないといけない。

一昨年農家さんが入院した時には草刈りに行ったし、いすみ市に行った時には、コメ作りで虫対策はどうしているのか聞いてきました。

虫対策は、畔の草で調整しているという回答でした。稲の穂が出てくると、穂に栄養が行くので、草の部分は栄養価が落ちてまずくなる。ところがその時に畔の草刈ってあると、稲しかないのでそちらを食べる。だから、穂が出始めたら畔は草ぼうぼうにしないといけない。そうすると、虫はそっちに移っていく。だから、草を刈っていい時期と刈ってはいけない時期がある。百姓ならだれでも知っていた。でも、最近の若い者はそういうことすら知らないとぼやいていました。また、農業は科学だとも言っていました。土壌を検査して、ＰＨ値を見て石灰を１反に370kg投入せよと指示した。昔は普通にやっていたことだそうだ。藁を焼いた灰を投入していた。で、それ

をやったら、以前より収穫できるようになった。だから、農業は科学だと。

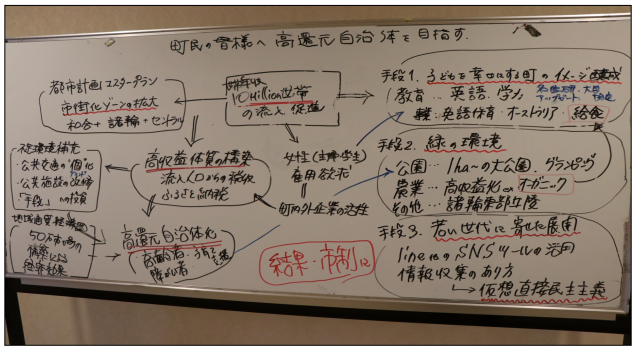
農業には科学が必要、頭が悪くてはできないという話を子どもたちにしたら、子どもたちは、農業やっている人は天才だと言っていました。何のために勉強するのか、ということも子どもたちに伝えられたらと思っています。

≪有機農業に関わる人の知恵を集める≫

そして、今年度から、オーガニックビレッジ推進事業を始めました。有機農家、大学教授、流通関連団体等で構成された各組織から有機農業振興のための取り組みについて、意見を集約しながら有機農業推進計画を策定し、対外的に公表することで、オーガニックビレッジ宣言を行っていく予定です。

≪町長が交代しても有機農業推進を継続できる仕組み≫

さらには、条例づくりも進めたいと思っています。トップが変わることによって施策が変わる可能性がありますが、条例を制定することによって、農家の方がそんなことに振り回されないようにしてあげたい。5年10年と土を育ててきた方に、それ捨てろということがないようにしてあげないといけない。有機・無農薬でやりましょうと農家の方々にご協力いただいて、子どもたちとも人間関係作っていただいているようなことを、どっかのタイミングでポンと切るようなことにはしたくない。



ホワイトボードに書かれた手書きビジョン

そのために僕らができることとして、条例化があると思う。有機農業を進めるには一定時間がかかる。それは、首長の任期で設定されていない。首長は役に立たんと４年で切られることもあるが、農家にとっての４年は、４回しか田植えができないということ。それではいけないと思う。私が居なくなっても職員たちはきっとやってくれると思うし、それぐらい成長していると実感しています。

魅力ある職員たちと二人三脚で

私はもともと金融機関にいたのでよくわかるのですが、企業は30年で淘汰される。だから、企業にとってはその中でどう変化していくか、ということが大事になる。しかし、役場だけ、変化することを嫌っているように見えました。変化する前の世の中では、役場の従前のやり方は喜んでいただけていたのだと思う。ところが世の中が変わってきているのに、役場が変わっていないので、世の中のニーズと乖離してきている。今いる役場の人たちは、役場はそんなものだと思っていましたが、30年前50年前役場が喜ばれていた時代から、変わっている。乖離してきたから、「お役所仕事」という言葉をいただくようになった。そのことを理解してもらい、追いつく、これしかないと思ってやってきました。

職員には、今までやってきたことをコツコツこなすということではなく、しっかりとしたビジョンを持って、そのビジョンを役場全体で共有し、そのビジョンに向けてバックキャストで仕事をしよう、とハッパをかけてきました。

そのために、町長室の前のホワイトボードには、ビジョンの全体像の手書き概要図を示し、自分たちの施策がどこに位置づいているのか、何をしているのかを意識してもらうようにしています。縦割り意識を取り払い、自分の部署の仕事が遅れているとよその部署に迷惑がかかるとか、自分たちが全体を引っ張っているん

だというような、意識付けをしています。

そして、明確な目標に向かって手順を考えるようになると、障害があっても、次善の策を考える発想になる。だから、常々目標に近づくために、プランＡだけでなくＣぐらいまで考えるようにと言っている。従来の積み上げ方式だとプランＡしかないので、これがだめだとずっと止まっている。

東郷町役場

職員の人間力も大事です。職員が、一人の人間としての魅力を高めてほしい。5時15分に帰って一人でゲームをするのではなく、まちを歩いてみたり、こんなことできるんじゃないかとふと考えるとか。もちろん休んでもらうのが大事だが、いろんなところで気付きが持てる時間として、休暇を活用してほしい。

それは、仕事人間になれということではなくて、私たちは生活に密接に関わる仕事をしているので、一生活者としてこれあったらいいのにとか、あるはず。言われたことをやる処理係になってしまってはだめで、魅力ある役場もすごく大事だと思う。

一つだけ良いまちというのはないので、施策の一つが動きだすと全体が良くなっていく。ぜひ、魅力ある職員になってほしい。

僕の所に職員がレクチャーしにくるが、それで誰が幸せになるの、この事業のどこに愛があるの、誰に対する愛情があるの、ということを必ず聞くようにしています。ひねりが足りないとか、施策の影響が２個ぐらいしかないなとか、注文をつけています。

そういうこともあって、職員も、これをあげても必ず町長からケチつけられるから、何とかぎゃふんと言わせようと努力しています。僕も負けてられないので、しっかり勉強している。プラスになることをそれぞれが出し合っていると感じます。職員も、ずいぶん気概を持ってきたと、私は評価しています。

（文責：原卓郎）